OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	再びインターフェロンについて
Author(s)	川俣, 順一
Citation	癌と人. 1978, 6, p. 7-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24158
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

再びインターフェロンについて

理事 川 俣 順 一*

癌学会が近づくと製薬会社の癌関連株価が上昇すると云われる。癌を薬でなおすことができたらという切ない願望が株式市場に反映しているわけである。

今年の癌学会でも「新しい癌の薬物療法へのアプローチ」というシンポジウムが持たれた。しかしそのテーマにはこれこそ癌の新薬であるというものは話題にならず，むしろ既存のいくつかの薬をより有効に使う研究，地道な基礎研究が重視されていた。その中で「インターフェロンの制癌効果とその機序」というテーマについて京都府立医大岸田綱太郎教授が発表され，国立がんセンター病院の福間博士と私が特別発言した。インターフェロンが今年になって市販の一般雑誌や週刊誌に喧伝されていたのでジャーナリズムも相当関心を持っていることが予想された。そこで主演者の岸田教授や追加発言者の私達は特に注意していたずらにジャーナリズムに利用されたり，誤解を与えねように細心の配慮をした。換言すればインターフェロンによってすべての癌が癒るというような過剰な期待を持たせたりすることの無いようにすることであった。そのため，甘い話はできる限り押え，冷静に実験事実のみを正確に伝える一方，インターフェロンの将来性を決定するためにはなお多くの研究を必要とするのでその芽を摘み取るようなことの無いための配慮もしなければならなかった。そしてこのような研究の推進に際して現在直面している問題は，研究に必要なインターフェロンの充分量を確保することであることを強調することになった。結局そのような背景に立って発表が行われ特別発言がなされたためであろうか，参加者からの格別の討議もなく終ってしまった。その結果一部の新聞記者氏にはかなり不満があったというか，肩すかしを食った感があったようである。それは学会後の記者会見の席で感じた。しかし，私達はこれで良かったと思っている。もっともその発表のあった８月８日の夜７時のＮＨＫニュースには癌学会関係の報道の中にインターフェロンの発表がとりあげられ，会場の映像も全国に流されたようである。このようにインターフェロンがとにかく話題になったのでもう一度かんたんにインターフェロンについて書くことにした。

インターフェロンについては本誌1976年第４号に解説を書いて置いた。元来インターフェロンはウイルス病の治療薬として研究されていたものである。ウイルス（たとえばインフルエンザウイルスとか日本脳炎ウイルスというようなもの）が細胞に侵入するとその細胞の中にこの侵入したウイルスの増殖を抑える物質が作られ血液中にも証明できるようになる。これは1954年わが国の長野泰一博士（東大名誉教授，北里大学教授）が発見され1957年イギリスのアイザックス（A. Isaacs）博士とリンデンマン（J. Lindenmann)博士が報告した時これにインターフェロン（Interferon，略してIF，以下IF と記す）という名前を与えた。IFの特徴はそれが作られたもとの細胞が人の細胞であれば人のウイルス病には有効であるが他の動物においては効果が期待できない。このことは，もし IF を他の動物で作っておいてそれを使って人のウイルス病に使おうとしてもそれでは効き目が無いということである。ここがIF療法の泣き所といえる。つまり，人に効くIFを作るためには人の細胞が必要であるわけで，実際今日試験的に使われている人のIFは人の白血球を培養して作ったり，人の体細胞を培養して殖やして作っている。

さて，このようにIFはウイルス病に対する治

* 大阪大学教授（大阪大学微生物病研究所長）

療効果を期待して研究されて来たもので，一般の化学療法薬と異なり，毒性が少く，人の細胞には障害を与えないというように考えられていたからなおさら大きな期待が持たれていたのである。ところが，癌に効くということは少くとも癌細胞に作用してその増殖を止めるとか殺す作用をいうのであるから，IFのように体細胞に対する障害作用の無いと考えられている物質に癌の治療効果を求めるのはいささかお門違いの話といえる。

しかし，実際には1960年代の終り頃から実験動物を用いてIFの癌に対する研究がはじまり，一方1970年代に入ると，スエーデンのカンテル（K. Cantell）博士，ストランダー（H. Strander）博士らによって骨肉腫に対するIF療法の研究がはじまり，これらの実験的ならびに臨床的研究が背景となって昨年頃からわが国でも急にIFがジャーナリズムの脚光を浴びるようになったようである。

しかし，癌の治療法，ことに薬物療法は，肺炎や結核などの化学療法とは比べものにならない複雑な要素を抱えており，はっきり言って，この薬を与えたら一発で良くなるというような結構な薬は無い。くどいようであるが，癌の薬物療法は，未だ研究すべきことが山積している現在，それは手術による外科的治療法のあくまで補助療法であるということをこの際改めて深く認識して置く必要がある。

そして，現時点で，癌で死ない最良の方法は，定期的な検診を必ず受けての「早期発見」，「早期治療」であるということを重ねて強調して置きたい。